

細田あや子氏 博士論文  
「メソポタミアのアーシブによる儀礼の研究」  
最終論文審査の要旨

2020（令和2）年2月3日

審査委員 古川のり子

審査委員 渡辺 和子

審査委員 大林 雅之

審査委員 深澤 英隆

主 査 前川 美行

・細田あや子氏による本論文は、古代メソポタミアの宗教を「アーシブ」と呼ばれる宗教的職能者が行う「儀礼」を通して探究することによって、古代の人々の生きた宗教への考察を深めるという、メソポタミア学の新しい研究の扉を開いている。

なお、細田氏が、宗教学・宗教史学、図像学・美術史学の専門分野において十分な専門的知識および研究業績を持ちながら、さらに楔形文字原典を読み込み探究することを目的として本学博士後期課程に入学され、研究者として新たな知への探求を続け、本論文をまとめられたことを特筆すべきこととして挙げておきたい。

・本論文の意義に関する概観は以下のとおりである。

19世紀の遺跡発掘による考古学調査に始まった古代メソポタミアの研究は、特に楔形文字が刻まれた大量に残存する粘土板、すなわち楔形文字文書の読み解きを中心にした文献学のほか、遺跡、建築物の遺構、彫刻、印章などの多くの造形物にもとづく考古学、さらには美術史学などの各領域で別個に進められてきた。現在、次々と新しい研究書が発表されているが、細田氏はそれらを参照しながらも方法論的な枠組みは伝統的な分業的研究から抜け出していないものとみて、新たにメソポタミアの人々の歴史や社会・文化を考察するために多角的な研究が必要であると述べる。その一つとして、本論文では宗教的職能者である「アーシブ」に焦点を絞り、多くの原典資料を集め、宗教学・宗教史的な視点を切り口として、総合的かつ多角的に解説し、古代メソポタミアの宗教史の一端を明らかにしている。

また本研究は、古代メソポタミア研究におけるキリスト教圏の研究アプローチや概念についても批判する **Material Religion** の動向も踏まえて、儀礼における「像」を宗教学的視点からの論考を展開している。残存する文書資料や像などの遺物をもとにした総合的な解読は「しぐさ」や「動き」などへの言及もあり、「生きられた宗教」としての宗教儀式の様相を生き生きと伝えている。古代語による原典の試訳を含めて堅実な研究成果と評価できる論文である。

・本論文の構成内容と議論は以下のとおりである。

第1章では、「本研究の課題と方法」として、古代メソポタミアの宗教がこれまでどのように研究されてきたかを先行研究から論じ、本研究の意義を提示している。最近の宗教学において、宗教を「人間と神霊など超自然的存在との間のシステムや相互関係」と定義して活発な議論がなされている。そのような学問的潮流の中で、病気や厄災に対する人々の心性から古代メソポタミアの宗教を探究する研究は始まったところといえる。本論文では、宗教的職能者である「アーシプ」に関する資料を、「像」にかかわる儀礼に焦点を当てて、儀礼の実践をその力学から理解することにより、古代メソポタミアの生きた宗教実践と構造を探究する目的が述べられている。それによって、医学や科学に対立するものとしての呪術及び宗教というカテゴリーにとどめることなく、古代メソポタミアの宗教理解に新たな見解を提起することが可能となる。そのための新たな方法として、筆者は「もの」がエージェント（行為主体）と認識される仕組み、すなわち聖なるものの顕現の動因となり、不在のものを指し示す機能解明の契機であると強調する。「アーシプの要覧」など古代メソポタミアの資料を宗教学的に検討することにより儀礼の特徴を浮き彫りにし、神像や造形物のもつ宗教的機能や意義を読み解くことが、アーシプの多義的役割の理解に繋がること、それがとりもなおさず古代メソポタミアの宗教を内面から理解することに繋がることの筆者の考えが展開されている。

第2章では、アーシプの職域や立場の理解のために、宗教的職能者といわれる他のいくつかの職種の領域を比較検討し、アーシプの社会的位置を考察している。最近になって議論が活発になりつつあるアーシプに関する先行研究もここにまとめて論じている。さらに、重要な資料である「アーシプの要覧」を試訳とともに概観し、この書をめぐる論考の検討も行っている。また、儀礼考察のために不可欠といえる文化人類学の儀礼理論についても検討している。ファン・ヘネップの「通過儀礼」、ラ・フォンテイン、エリアーデの「イ

ニシエーション」理論等の研究を参照してアーシプによる儀礼理解を深めている。

第3章から第6章までの章で、アーシプによる、像に関連する儀礼を具体的に論じている。第3章では、神像の口洗い（ミース・ピー）と口開け（ピート・ピー）の儀礼をテキストから儀礼における行為、言葉、時間的経過などを解説して、儀礼の力学を明らかにしている。像の浄化と生命の付与、すなわち神像の変容が、アーシプによりもたらされる過程が詳細に分析されている。第4章では、「除災と招福の儀礼における像の役割」と題して、テキストの読み解きと、出土した像や護符の儀礼における意味を解明している。そこに示されている「5匹の犬」などの図版とその解釈は、筆者の論考の証左となっている。第5章では、「キシプーに対抗する儀礼—病気治療の儀礼」と題して、病気や厄災の原因を特定し、原因が供養されていない死霊が訴えている場合、あるいは何者かが呪詛（「キシプー」）を仕掛けている場合などに応じて行われる儀礼について分析を行っている。さらに小像を燃やす所作や唱えごと、火を消す動作や唱えごと、等儀礼の儀式手順を時間・空間を合わせて解説し、「火」と「水」を自在に操ることの儀礼及び宗教的意義を考察している。両義的象徴である「火」と浄化する「水」の力を得て、病人は復活し個人として再生する。真水の神エアも登場し、2つの大きな川と海というメソポタミアの大自然との関係も示唆されている。第6章では「ラマシュトゥ対抗儀礼の多様性」と題して、護符に多く用いられている悪霊の一つ「ラマシュトゥ」に関連する儀礼を論じている。特徴的なラマシュトゥの図像からの解釈がなされ、さらに犬の小像、護符などの果たす役割を儀礼の実践過程をたどりながら論考している。

最後の第7章では、儀礼における像の機能と意義について総括している。それらの像と向き合い、唱えごとや動作を行ったアーシプによる儀礼の特徴を明らかにしている。まず初めに、神像の生動化を挙げている。文字と図像によって力を持つ護符や像が活用され、神像が魂を持つ神となることの意義は、単に象徴や表象として神性を顕現させるだけでなく、現前化することによって臨在を感じることができるとも意味があると考察している。次に、病気治療の儀礼について述べている。ここでは、生と死の境界を越境し、魂の媒介者としてのアーシプの特性が論じられている。災因論にもとづいて病気治療をとらえ図7-1では、「病気が治癒するまでの道筋」としてアーシプの治療行為をまとめている。最終審査では、この病気理解や治療モデルは近代医学のものであり、魂の癒し手としてのアーシプの役割や病気平癒のプロセスについては新たな図式の提起が望まれたとの意見が出された。メソポタミアの時代における病気と治癒の概念は現代のモデルとも異なるモデ

ルを筆者の論に従ってまとめることも可能であろう。

こうして最後に筆者は、不可視である神性や霊を像に入れて神を現前化させる儀礼をつかさどるアーシプは、自らの宇宙論を持ち、天と地との間の媒介者であり、世界との調和を回復する儀礼をおこなう技能を持つ能力を持つ人と総括している。その上で本論文の結論として、アーシプはシャーマンと呼べるとの解釈を強めるに至っている。

・ a) ~ e) の項目に沿って結果を以下のように示す。

a) 問題意識の明確性、研究テーマ設定の適切性

宗教的職能者である「アーシプ」に注目して、宗教学・宗教史的な視点を切り口とした総合的分析を行い、古代メソポタミアの人々の宗教観を明らかにするという問題意識は明確である。古代オリエント宗教研究の現状に照らしても意義ある主題選択といえる。さらに、補筆により問題の意義が明確になり、アーシプの働きを像の儀礼から明らかにして総括に至る構成も適切である。

b) 研究方法の妥当性・厳密性

オリエント文献学の正統的な方法にそって先行文献への言及がなされている点で信頼できる。さらに文献学的研究のみならず、楔形文字原典を用いて、テキスト、図像資料など多くの資料を扱うというメソポタミア考古学・図像学・物質的宗教研究、人類学などの方法と成果を結びつけて取り組んでいる点は評価に値する。

c) 先行研究検討の的確性

先行研究の検討は、多角的な考察にふさわしく、十分になされている。そもそも膨大な研究領域にわたっていることを鑑みると、適切な研究を検討して概観していると評価できた。それらは修正による補筆により改善されたことが認められた点でもあった。

d) 論旨展開の一貫性

資料は総合的に集められ、分析されており、分析手法も問題設定も明確である。多角的な読み取りを進めながら、最後に「アーシプとは何か」を考察して主張を明示するに至っている。また、儀礼分析においては、個々の要素の意味を検討するだけでなく、互いに結び付けて解釈することで豊かな意味を持つ儀礼の全体像を明らかにすることに成功して

いる点で高く評価できる。論証を挙げながら解釈がなされており、最終的結論へと繋がる論旨展開には一貫性が認められた。また、第1章にメソポタミア研究の概観および先行研究の批判的検討が加わったことにより、本研究の位置づけ、研究視座がより明確になった。なお、望まれる今後の課題として次のようなことが挙げられた。

- ・アーシプの古代メソポタミア社会における位置づけ、国家とのかかわり方などを解明していくこと。

- ・アーシプの活動の全貌解明という大きな目標をもって研究してゆくこと。

- ・アーシプの宇宙論とは何かについての神話・伝説との繋がり解明。

- ・近代医療モデルとは異なる治癒モデルの提起と比較。

- ・アーシプの儀礼を一般儀礼論としてさらに掘り下げること。

#### e) 研究の独創性および専攻分野の学問研究への貢献

古代メソポタミア宗教の研究にあたり、分業化していた各分野の業績をまとめ、宗教学を基盤として総合的に論ずるという目的は達成され、アーシプを中心とする儀礼や宗教的職能者像に新たな解釈をもたらした。十分な学術的水準での古代オリエント研究が日本で遂行されたこと自体が貴重な学術的貢献といえる。オリエント学と宗教学・人類学の成果を総合した点に独創性が認められた。世界の他の分化との比較への道を開いた点で、本論文は貴重な共有財産である。アーシプによる儀礼の宗教学的な研究としてはパイオニア的業績であり、学会への貢献度も高く、今後への貢献を十分に果たしうる博士論文であると評価できる。

以上

細田あや子氏 博士論文  
「メソポタミアのアーシプによる儀礼の研究」  
試験結果の要旨

2020（令和2）年2月3日

博士論文の最終面接試験は、令和2年1月30日（木）17時30分から19時まで、大学院205教室において、久保田研究科長の司会により、公開で実施された。

初めに申請者から、論文の概要がパワーポイントを使用して発表された。論文の目次に従って構成を示し、「はじめに」、第1章「本研究の課題と方法」、第2章「メソポタミアのアーシプの儀礼」、第3章「神像の口洗い（ミース・ピー）と口開け（ピート・ピー）の儀礼」、第4章「除災と招福の儀礼における像の役割」、第5章「キシプーに対抗する儀礼―病気治療の儀礼」、第6章「ラマシュトゥ対抗儀礼の多様性」、第7章「アーシプによる儀礼の構造」、「おわりに―展望 古代宗教の比較宗教史研究への視座」の順で表や図像の写真などを織り交ぜて発表が行われた。次いで、1次審査後の修正を含めた最終論文に関して、各審査委員から研究内容の意義、完成度、今後の課題などについての質疑が行われた。

以上の詳細については、別紙「最終審査の要旨」に記載されているが、質疑に対する申請者の回答から論文の完成度が十分に高いことが認められた。その上で、「宗教とは何か」「アーシプの儀礼はメソポタミアの宗教と呼べるのか」「宗教・呪術および医学・科学とは何か」など、根本的な興味深い議論がなされた。生と死をつかさどるアーシプという職能者たちの姿や宇宙観が明らかになり、紀元前4千年紀末からのおよそ3千年間に及ぶ古代メソポタミアの神話がこの儀礼と関わりを持つことも述べられた。最終的に、ティグリス・ユーフラテスの2つの川と海に面した土地が生んだ神話と儀礼を含む宗教として地方色を維持しながらも体系化されていたことを論証した。

審査後、5人の審査委員による合議が行われ、その結果、提出された論文は博士論文として十分に価値あるものとして評価し、全員一致で「合格」と判定した。

以上